

## 中国視察報告 大学院生による授業（体育）

齋藤 潤次

教職大学院教育実践コース2年

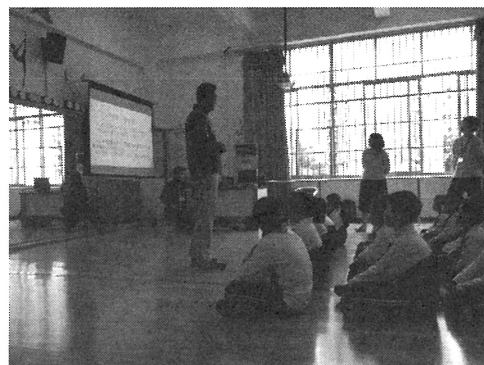
子どもは「体育が好き」というのは、文化や言葉が異なる中国でも、同じであった。目をかがやかせ、真剣に体育の学習に取り組む惠州附属学校の子ども姿が今でも心に残っている。

訪中事業での体育授業の実践では、2つのことを大切にして授業を構想した。1つは、中国の子どもたちが日本の文化に触れることである。もう1つは、日本の授業スタイルや学習内容に触れることである。

今回の惠州附属学校での授業では、授業の導入として、日本で行われているラジオ体操と鬼遊びを取り入れた。ラジオ体操は、日本で昔から行われており、日本で育った人であれば知らない人はいない、誰もが知っている体操である。音楽と号令に合わせて体を動かすラジオ体操を中国の子どもたちはどのように行うのか、感じるのかとても興味があった。子どもたちは見様見真似で体を動かしながら、楽しくラジオ体操を行っていた。

鬼遊びは、子どもに親しみ楽しまれている遊びであり、体育の学習にも多く取り入れられている。授業で行うセブンボールズの動きにつながる運動でもあったが、室内での授業となり実施することができなかった。

最後に行ったセブンボールズでは、新潟市の授業づくりで大切にされている授業スタイルを用い、協働的な学びの中に思考力・判断力の育成する授業を構想した。セブンボールズは、正方形に配置された4か所の陣地から、中央に集められた7つのボールを、順番に1つずつ自分の陣地に運び込み、制限時間にたくさんボールを集めたグループが勝ちというゲームである。セブンボールズの教材的価値



値は以下のとおりである。

- ・ボールをもって走るという簡単な技能でだれもが行える。
- ・全員に一定の運動量を確保することができる。
- ・ボールの数、位置、陣地とボールやプレイヤーの距離など関係性を判断し、グループの仲間と協力して、簡単な作戦を立てて楽しむことができる。
- ・主運動につながる運動として、ラグビーの動きや道具になれるための動きをゲームに取り入れることができる。

「ゲームに勝つためにどのような作戦を立てるか」ということを学習課題として、ゲームを行った。ゲームが始まるとボールを集めるために走る子どもたちは真剣そのものであった。子どもたちがルールをより理解するにつれて、自然にグループの仲間と話し合う姿が見られるようにもなった。言葉が分からず、十分な支援できない歯がゆい場面がたくさんあったが、グループの中でゲームに関する話し合いがなされているような様子が見られた。まとめの場面でも、ゲームに勝つための作戦として、子どもから走るスピードやボールの位置に関することが考えとして出された。子どもたちの発言やつぶやきをもっとひろい、授業に生かすことができれば、友達と相談してゲームに勝つための作戦を立てるよさを味わわせることができたのではないかと反省している。

協議会では、惠州附属学校の先生から「技能についてどう考えるか、どのように技能を身に付けさせるのか」という運動技能についての質問が出された。もちろん日本でも技能は大切にされている。今回の授業では、思考力・判断力を生かして学ぶ日本の授業を中国の先生方に見ていただきたかったという意図を伝えた。楽しく運動に取り組む子どもたち、熱心に授業づくりに取り組む先生方から、たくさんのことを学ぶことができ、貴重な経験をさせていただくことができた。体育の授業観について議論しながら、授業交流する機会を是非またもちたい。

